
蘇鉄の木

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蘇鉄の木

【Zコード】

Z3705D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

天下人豊臣秀吉。彼は堺で見つけた銘木を自分の城である桃山に移した。すると城の庭で夜な夜な泣く声が聞こえて。石田三成のいいお話です。

第一章

蘇鉄の木

文禄二年のことである。この時の天下の主は豊臣秀吉であった。彼は一介の農民から天下人になつたが日本の権力者としては異例な程派手好みであった。それは美といつものに關しても同じであった。

とかくみらびやかなものを好んだ。金を愛し花にしろ木にしろそりであつた。だが時として静かなるものも愛するといつ纖細な感性も備えていた。それはこの時も同じであった。

彼が堺の妙国に来た時のことである。そこで見た見事な老木に心を奪われたのだ。

「これはよい木じゃ」

「確かに」

彼の側近の石田三成がその言葉に応える。小柄で猿顔の主に対しうで鋭利で整つた顔立ちをしている。顔からも切れ者であるといつこどが窺える。

「これは中々。見事なものです」

「のべ、治部よ」

秀吉はここで三成をこう呼んだ。彼の朝廷での役職であり彼の仇名と言つてもいいものになつてゐる。

「この老木をずっと見ていたくなつた」

「では大阪へ移されるのですかな」

三成はそれを聞いて述べた。

「大阪の城へ」

「いや」

だが秀吉は首を横に振る。そつではないといつのだ。

「それは止めておけ。この木は大阪には合わぬ」

「ではどうするのですか?」

「桃山じゃ」

秀吉の返事はこうであった。桃山にも彼が築いた城がある、やはり美しい城であり彼の象徴の一つとも言える存在であった。

「桃山に移したい。それでどうじや？」

「桃山ですか」

三成はそれを聞いて考える顔になつた。暫し考えてから秀吉に對して答えた。

「ここでよいのでは？」

「何故じや

「何處となくありますか」

そう前置きしてまた秀吉に對して述べる。

「この木はここにあるからこそ相応しいよう思えてきました」

「ここにあるからか

「はい、あくまで私の考えです」

一應はそう断るが三成自身はこの木が今ここにあるこの風景に合つているのではないかと思えていた。それは調和的なものであり彼の美觀によるものであった。

だが秀吉の美觀はまた異なる。彼はそれを承知していた。そのうえで話をしていることもわかつていた。

「ここにあつた方がいいと思いますが」

「いや、わしはそつは思わぬ」

秀吉がこう言つとはわかつていた。だから驚かなかつた。

「やはり桃山で見たい。この木は桃山にこそ相応しい」

「それではやはり

「うむ、すぐに入夫達を集めよ」

「そう三成に命じる。

「桃山に移して見続ける。よいな」

「わかりました」

三成もこれといって反対はしなかつた。時として秀吉に対しても厳しいことを言う彼であるが今回はたかだか一本の木であるからそ

れは留めたのである。この木は桃山に移された。秀吉は桃山においてこの木を満足気を見て楽しむのであつた。

「ふむ、やはりのう」

城にある自身の屋敷の庭に移された老木を満足した顔で見て居る。「この木はやせつこにあります」

「いや、全く」

「その通りです」

側の者達がそれに相槌を打つ。彼等にとつてはこれも仕事なので特にそつは思つていらない者もいる。三成もそれは氣にしてはいなかつた。

「そうじやうひ、治部よ」

「そうですな」

三成は表情を変えず秀吉に応えた。

「確かに悪くはありません」

「そうじやうひ、そうじやうひ」

「ただ。一つ悪うのですが」

「むつー?何じや

秀吉はそれを聞いて三成に顔を向けた。いつもして彼に問うのであつた。

「この木はここに幸せなのでしょつか

「幸せか」

「はー。今ふと思つたことなのですが」

そう秀吉に述べる。

「木がそう思つと考えるのは、いたしか滑稽であります」

「ふむ。それは少しづな」

秀吉もこれには頷くことはなかつた。彼の知恵をよく知つてはいるが。

「的外れではないか」

「左様ですか。それではここにあって特に困る」とはあつませんな

「わしはそう考える。それはそうとしてじや」

「」で秀吉の言葉が景気よくなつた。

「酒はどうぢや。よいのを貰つたのぢや」

「酒ですか」

「つむ、太夫からな」

福島正則のことである。秀吉にとつては数少ない子飼いの武将の一人である。なお三成とは秀吉の死後激しく対立することでも有名である。

「わしに獻上してくれたものぢや。どうぢや」

「そうですね。是非共」

三成もそれには少し笑顔となつて頷いた。酒は嫌いではない。飲まれる性質の男ではないがそれでも好きかといつどどちらかというとそうであった。だからこそ断らなかつた。

「頂きます」

「御主等も飲め」

「遠慮は要らぬぞ」

「おお、それは有り難い」

「では我等もご相伴を」

「皆で楽しめばよいのじゃ」

秀吉は明るく大きく笑つて言つた。

「それで心ゆくまで飲もうぞ」

秀吉の人気の秘密はここにもあつた。氣前が抜群によく飾らない性格だからだ。そうしたこともあり天下人になれたのだ。三成もそんな秀吉が嫌いではなかつた。彼は今は微笑んで秀吉を見ていた。しかし怪異はこの日の夜にもう起こつたのであつた。

その夜。見回りの兵が城の庭に入つた時であつた。そこに何者かを見た。

「むつ！？」

白い人影であつた。人影は庭の中を歩き回つていた。兵はそれを見てすぐにその側まで迫つた。

「待て、怪しい奴」

彼はすぐに曲者かと思った。そうしてすぐに手にしていた槍をその影に向けて突き進んだ。しかし槍は虚しくその人影を通り抜けたのであつた。

「何とつ

「私は曲者ではございません」

驚く彼にそう人影が告げてきた。見れば何のことではないただの老人であつた。髭のない顔に一面の皺がある。何処か弱々しい顔をしている。

「決してどなたも傷つけるつもりはござりません」

「ではどうしてここにいるのだ」

兵はそう彼に問うた。ここにいるのにはあまりにも不自然であったからだ。

「連れて来られたのです」

「連れて来られただと」

「はい」

「そう兵に答えた。

「その通りです。それで」

「ううむ、訳がわからぬ」

兵は老人のその言葉を聞いて首を傾げる。見たところ槍が突き抜けた以外はごく普通の老人である。その彼がどうしてこの城に連れて来られたのか、彼には合点のいかない話であった。

「それはどういうことなのか」

「秀吉様に連れて来られました」

「太閤様にか」

「そうです。私はここにはいたくありません」

悲しい顔と声での言葉であつた。

「故郷に帰りたいのです。あの穏やかな故郷に」

兵に対して訴えて語るのであつた。この老人が出たのはこの日だけではなかつた。次の日もまた次の日もであつた。当然ながら秀吉

の耳にも入り彼は三成に対して言うのであつた。

「これは一体どうしたことじゃううな」

「その老人ですか」

「うむ、夜な夜な庭に出て来ておる」

「そう三成に語る。

「そうして帰りたいと兵に告げる。わしにここに連れて来られたとな

「殿下ですか」

「ここに年寄りを連れて来た覚えはない」

秀吉は服の中で腕を組んでいた。やつして三成に述べた。

「そんなことはな。じゃがその年寄りはわしが連れて来たと申す。全くおかしなことじや」

「いや、これは」

だがここで三成は言つのであった。

「おかしなことではありますまぜぬ」

「そうなのか?」

「はい、その老人はおそれく木です」

こう秀吉に述べた。

「殿下が堺より移したあの木なので」
「あれが木ですか」

「そうです。だからこそ帰りたいと申すのでしょうか」

三成は静かに秀吉に述べた。

「堺に」

「左様か」

「帰りたいと言つている者に無理強いはなりますまい」

三成はまた述べた。

「ですからここは」

「そうじやな」

そして秀吉もそれに頷いた。彼とて決して無法な男ではない。情も知つてゐる。だからこそ今三成の言葉に頷いたのである。

「それではそのようにしよつ」

「はい。それが宜しいかと」

「わしとて木は楽しく見ておきたいものじや」

老木を見る。その秀吉の目は限りなく優しいものになつていた。

「それに悲しむ姿は見るもの聞くのも忍びない。ましてそれがわしが原因ならば」

「それでこそ殿下です」

三成はここで秀吉を褒め称えた。

「天下人であらせられます」

「そうじゃな。しかし天下人というのは案外不自由じゃ」

秀吉はふと苦笑いを浮かべた。

「いへい」とでも氣を使わなければならぬのじゃからな。しかし

「しかし？」

「それでも悲しむ顔よりは笑顔の方が見たいものじゃな」

そう言つて木を見るのであつた。その後間も無く老木は元の壠に
戻された。それから老人が出るという話は消えた。秀吉は壠でその
老木を見ることにした。これもまた天下人の逸話の一つである。

蘇鉄の木 完

2007・11・21

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3705d/>

蘇鉄の木

2010年10月8日13時45分発行